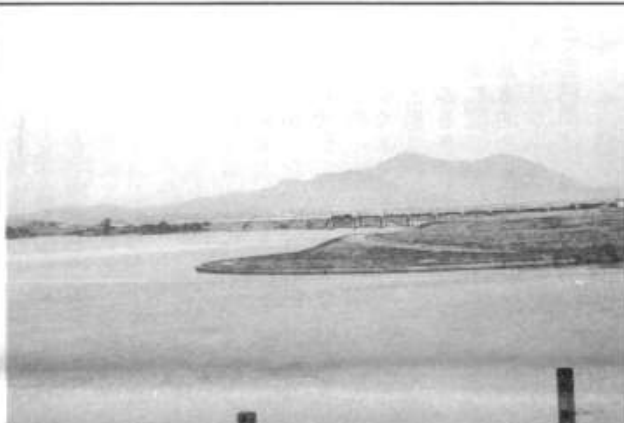




月刊 第 568 号

寒さから冷たさへ

寒ーむなってきたね、と言う言葉が挨拶の前につく季節となった。寒いと言うのは大雑把な、例えば体全体で感じたり、季節の移ろいの中で気温の低下を言ったりする時に使うよう、冷たいと表現する時は、感覚的であり、部分的である。異常と言われた今年一年を通じてからはあまり荒れることもなく静かな秋と言ってよいのでは



秋の一日信濃川右岸を散策した。流れに沿って右手が右岸となるのだと河川に詳しい方から教わった。可動堰の向うに国上山弥彦山の姿が美しい。



新洗堰とその先に見える真紅のアーチ橋は、この辺の目印でもある。その間に親水公園があり、散策には絶好のポイント。



上流には与板橋がある。寺泊長岡線で左岸の風景は見慣れているが、右岸には箱根の千疊ヶ原をもしのぐスキ原が広がっている。

なからうか。いつも紅葉と言うにはあまりにも哀れに枯れ果ててゆく女関前のドウダンツツジも今年は潮風に傷めつけられることもなく美しいです。ねとほめて下さる方が多い。一度にさつと裸になってくれれば仕末もよしやすい樺もそんなことで毎日ばらばらと葉を落とすつづけてようやく2/3位まで散った様子である。ゴミ収集車に合わせて二日に一度掃き集める落葉は90リットルの大きなゴミ袋に毎回四個位出るので出すのに気が引ける思いである。以前は菊作りを趣味にする人達が袋を持って貰いに来て下さってお互喜び合えたものだが近頃そんな奇特な方はおいでにならない。先日珍しいこと

に通りがかりの人がそのゴミ袋を目敏く見つけて貰ってもよろしいですかとのことで、なっちゃんもお持ち下さいとゴミ収集車の手を煩わさないで済んだのだが、まさか二日毎に掃きに来ませんかともおすすめてできず、又袋につめたらお電話しますと申し上げた次第。

のとして年々少しづつでも樺を植樹していったら将来素晴らしい町の財産ともなり、又海の町の寺泊としては将来に向って里山づくりを注ぐ必要がある。植樹への関心が高まりつつあるように感じられるのであるが、見える植樹(花咲く木)イベント植樹が多いように思われる。私事になって恐縮であるが緑の応援隊は少しづつではあるが毎年十一月三日のはとんどの木々が休眠に入る時期に植樹をつづけ今年も依頼のあった法崎団地と水族博物館前の土手に植樹をした。松に代って樺が育ち五百年たった後の寺泊の里山に堂々とした樺の巨木が繁り、春からは夏へは緑の葉を拡げ、秋には紅



柿が色づくと言者が青くなると言う程に柿は健康食品。
それ故か農村地帯ではどここの家にも柿の木がある。
どこにでもある故に見捨てられている。



寺の鐘楼は大根の干し場に絶好。
柿が吊り下がり、干葉が吊り下がる。
朝夕の鐘の音を聞き乍ら熟成してゆく。



寺泊座「ぶたい」の屋根は今も健在。
勿論葺き替えられた屋根である。
家具店、民宿と三代を生き抜いている。

葉して沢山の葉を降らせ、土を肥やし、水を浄化し海を育ててくれることを想像すると植樹への情熱がかきたてられる。植樹で汗を流したあとの打上げも又楽しく話もはずむ。

分水改修工事の話はひと頃の熱気も薄れて近頃は専ら町村合併の話で何処かへ消し飛んだ感じであるが、むしろ改修工事に絡む町村で新しい市町村作りが企画されてそれに向って話が進展してゆくような形が本筋ではないか。ふるさとだよりでは政治と商売に關わる内容は斥けると言う基本的な立場をとってきているのだがふるさとへの思いとして寄稿頂けたらと思っている。

あつと言期間に残り一ヶ月とあってしまったが十一月は随分町では催しの多い月であった。文化祭、寺泊小学校百三十周年記念式、選挙をばさんで、芸能祭、二人の書道展、シャンソンの夕べ、ボジョレヌーボーを楽しむ会、そろそろ個々の忘年会等々多忙な中に日常を離れて心身リフレッシュする機会に恵まれる月であるように思う。

各寺々では報恩講が勤修されお経に法話におとときにとこれも又寺の多いこの町の特徴でもある。ういよ荒れる日が多くなっている。来年二月までの辛棒だと昔から心構えはできていたもののよい日和に恵まればこれぞ儲け物とじっとしておれ

ずいぶんこれ仕事に精を出すのもこの町の人情であろう。

寺泊座の思い出

さとう・のぶひと

荒町の金十郎魚屋さん、隣の久我床屋さんの前にひとときわ目を惹く大きな建物がありました。一般の民家に比べて背丈の高い二階建ては、鳳凰が翼を広げるように薨を上げ、神社か仏閣のような威厳を持って街並を見下ろしていました。町の人々はみな、それを「ぶたい」と呼んでいました。

「ぶたい」はすなわち「寺泊座」です。寺泊に住む五十代以降の方なら、誰しも記憶にあると思います。久我床屋さんは今はな

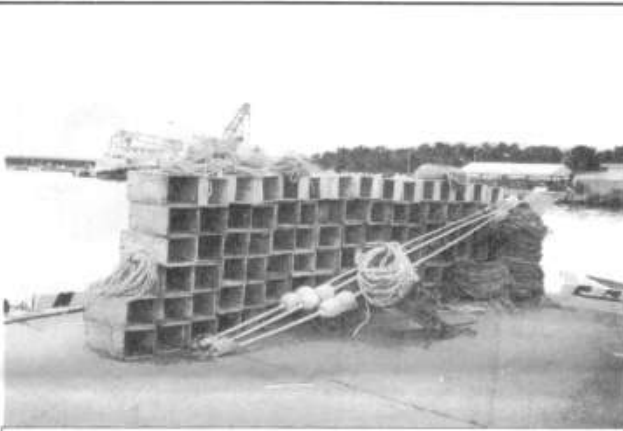
く、田町へ上がる細い小路は拡張されて付近は一変いたしました。が、「寺泊座」の建物は頑として残っています。別の用途でまだ利用されている気配です。左右に反り返った高い屋根が、盛んだった時代の面影をわずかに偲ばせてくれます。

私は「寺泊座」を映画館として知っている世代です。映画館のことをなぜ「ぶたい」と呼んだのでしょうか。「寺泊座」が寺泊文化の近代化に果たした役割と意義について、かねてより考証が必要だと思ってきました。

寺泊町の近現代文化史の中で「寺泊座」の占める位置は、そう小さくはないと思うのですが、いかがでしょうか？

さてその「寺泊座」です。綴帳の後ろに中幕、回り舞台があり、見物席の中央と両側の棧敷席の前に花道、二階の見物席、楽屋には役者の宿泊施設を備えた本格的な劇場だったという話です。数々の名優の舞台もあつたらうにと容易に推察できます。公演記録が残っていれば、と思うのですが。

実は私は、この「寺泊座」で何度か芝居を見た記憶が仄かにあります。まだ小学校に上がる前のことで、物語の筋が追える歳でありません。しかし「丹下左膳」とか「月形半平太」という剣客の名前ははつきり覚えてあります。どき回りの「市川××一座」などという劇団ではなかつ



今はもう海の底でタコの入居を待っている。冬の味覚ミズダコ捕獲のタコ壺ならぬタコ箱。言うなればタコの終いの栖家。



豊漁で始った今年の鮭魚も最盛期に越前クラゲの襲来で大童である。一つの定置網に洋傘大のクラゲが300個も入るとか。



弥彦の菊祭り見物の客は必ずと言ってよいほど寺泊魚のアメ横に寄る。週末晴天となれば駐車場は満杯となる。アリガタや。

たてしようか。
町の婦人会でしたか、青年団の公演も「寺泊座」で見たとおもうのですが、ほとんど記憶に残っていません。もし、町民団体の演劇活動に詳しい方がおられたら、当時の公演の様子について、ぜひお教え下さい。
私が映像を見た最初の記憶は「幻燈」でした。絵や写真に光線をあて、レンズで拡大してスクリーンに映し出す、いわゆるスライドです。大画面の中で展開する奥行きと広がり、一紙芝居」の比ではありません。保元の法福寺さんで見せてもらったのですが、幼児の私には大なる感動ものでした。

小学校に上がると、学校では年に数回、「寺泊座」に生徒を引率して映画を見せてくれました。学校の南運動場に暗幕を張り、上映会も催されました。視聴覚教育の走りだったのでは。そのほか聖徳寺さんの太子館、円福寺さん、天理教片町分教会などで催された上映会が記憶に残っています。GHQは民主主義啓蒙政策の一環として、十六ミリ映写機を一千数百台、全国に貸し出したといわれています。そのおかげと影響が寺泊町にも及んだのかも知れませんが。

テレビの普及する前、映画はまさに動く写真でした。ニュース映画であれ、記録映画であれ、少年雑誌の画面からは得られないリアリティに圧倒されたものです。「寺泊座」では劇映画をよく見ました。一九五〇年代は日本映画の黄金時代と呼ばれ、黒澤明監督の『羅生門』(京マチ子、三船敏郎)が一九五一年八月、イタリアのベニス国際映画祭でグラン・プリを獲得しました。敗戦の痛手からようやく立ち直りかけていた日本人にとって、水泳の古橋広之進の世界記録、ノーベル物理学賞の湯川秀樹と並んで、民族的な自信回復の大きなきかけとなりました。日本映画の水準は、欧米と比較して勝るとも劣らないものであることが証明されたからです。

私が映画ファンになり「寺泊座」に通い始めるのは、残念ながら、この黄金時代の後半、一九五〇年代後半から、六〇年代前半までのほんの数年にすぎません。学齢で言うと、小学校の高学年から中学校にかけてということになりました。テレビはかなり普及していましたが、映画は「テレビよりずっと面白いもの」という感覚がありました。私は「寺泊座」で上映された劇映画を通して、黒澤明はじめ、巨匠と謳われた小津安二郎や溝口健二と出会うことになったのです。で、どんな映画を見たか? それについては、また機会を改めて書くつもりです。

誌代御後援 (敬称略・順不同)

東京都	引田	三イ	金三千元
〃	広川	修二	金三千元
〃	廣川	幸三	金三千元
〃	小黒	義雄	金三千元
〃	五十嵐	甲子男	金五千元
〃	千葉市	昌弘	金五千元
〃	岩槻市	河合	金三千元
〃	千代田	昌弘	金三千元
〃	原野	善之	金三千元
〃	新潟市	佐藤	金三千元
〃	寺泊町	内藤	金三千元
〃	足立	久	金三千元
〃	石原	敏	金三千元
〃	大塚	勇	金三千元
〃	高橋	春枝	金三千元
〃	蓮沼	欣治	金三千元

誌代御後援については領収書代りでもあり又誌友の住所確認の欄でもあります。間違い等ありましたらお申下下さい。



ふるさと・書 二人展のお二人方。
左が渡辺さん、右が小野田さん。
あったかふるさと、にっこり熟女。

小波会十一月句会詠草

兼題 そぞろ寒・賽虫他当季

裏口へ

長き廊行くそぞろ寒

小島 温石

背負い来る

投網のしづくそぞろ寒

加勢 白汀

そぞろ寒

時に寡黙の老二人

外山 海子

日捲りの

やせが目立ちてそぞろ寒

大越碧水子

待つ人の来ず

夕暮れのそぞろ寒

斎藤 紫苑

宵せまる

そぞろ歩きのそぞろ寒

内藤 蓮子

賽虫の

波音まかせ風まかせ

小島 冬扇

糞虫の

吹かれてぶらり浮世風

能登 頑牛

秋草や

芭蕉句碑立つ国境

外山きよし

一瀑を

真正面に紅葉冷

小形 美代

古九谷に酒

白滋にはいくらの朱

中村 流風



観光協会の呼び掛けで11月13日、ツバキの植樹に精を出
すボランティア。
寺泊小学校でも植樹が行われた。

貼り替えし
障子で母の忌を迎え

江原 汀子

陽あたらば

ただおろおろと残る虫

水沢 蕉子

藪を分け

触るれば落つる零余子かな

竹内 霍山

あとがき

年賀ハガキに年末ジャンボ宝くじと言う声を聞くとき時間の進み方は一年中同じ筈なのにどうしたのか心急かされることになる。今年是一年が早かったと毎年同じ言葉を繰り返して忘年会と言う通過点から急速に大晦日へ下降着陸、待つ間もあらばこ

そ離陸の噴射は待ったなし、エンジン止めれば忽ち失速墜落の浮き目に会うことになる。まことに忙しい世の中である。スローライフ、うんそうだと背きながらも仲々軌道修正できない現実の中で、それでもふるさとと言う言葉が仲間となつてはつとした時間の中で生れるものがある。この度、文化会館はまなすで催された「ふるさと・書 二人展」についてはそんな思いで観賞した一人である。ふるさとを離れてそれぞれ生活を持ち久々に出合った同窓の二人が、たまたま書と言う共通の道歩んでいた。

その二人、幸田智子(旧姓小野田)さんと松野千代子(旧姓



順徳帝顕彰碑の脇に植えた白菊が咲いた。
ここでは観光客に持ち去られることはない。
真野では何度も被害にあった。

渡辺)さんが一緒に書道展を開くことになった。これは一つの試みである。まだまだこのような形でふるさとを同じくする仲間同志が結び合ふふるさとで出遇ってゆく企みが生れてくることに期待したい。

毎月二十日発行

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 中 村 興 樹

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九九番

振替番号 〇〇六二〇三三五四五

印刷所 吉野印刷株式会社